

濱名へは四里ばかりとなん、今ぎれの左にあたりて、北にみゆる山のあなたなりといふ、此渡りは百年ばかり以前、地震の時より家など鹽にひかれて、かくかはれりといへり、日よく晴ぬれば、水底に屋形のかたちみゆといへり、此程一里船にて渡る、あら井の南外の海なり、詠めやれば天と海とひとしく見わたされて、波の立あがるは、白雲の風に飛て忽消かへるににたり、まへ坂にあがりて、蛤など蘆火にててうせさせつゝ、かはらけとるものいそがはし、

〔丙辰紀行〕今切

遠州荒井の渡より、奥の山五里ばかり海となりて、大舟も出入事、むかしは山につゞきたる陸地なりしが、中比山よりほらの貝おびたゞしくぬけ出て海へ入ける、其跡かくのごとく海となりて、今切と名づくるよし、古老いひつたへたり、

一葉扁舟寄旅身、潮波通信遠州濱、海山何借巨靈手、我國元來造化神、

〔垂加草〕遠遊紀行

荒堰。

橋斷濱名跡、舟過荒堰中、世間皆一瞬、鷗睡水邊濱、

〔東海道名所記〕三舞坂より荒堰まで舟の上、廿三町○中

樂阿彌申すやう、舞坂より舟にのるに、七つ時分よりまへには渡しあり、七つ時分過れば、舟をいださずといふ、早くのり給へとて、男と共にいそぎふねにとびのる、艤のかたひろくて、ゆるりとのりけり、船頭は舟に棹さし、櫓をたてゝをす、男たゞねけるはいかに船頭殿、このうみを今切と名付たるよしうけたまはりたし、さだめて子細の侍べるやらんといふ、せんどうこたへていはく、むかしは山につゞきたる陸地なりしが、百餘年ばかり以前に、山の中より螺の貝おびたゞしくぬけ出て海へとび入侍べり、その跡ことの外にくづれて、荒井の濱よりおくの山五里ばかり